

# 古事日本裏面史「女帝」より

## 謎めく神功皇后の産み月

なぜ古代日本の時代の節目節目に、女傑や女帝が現れたのだろうか。このようなことは、中国ではありえない意外なことで、それ故「魏志倭人伝」には、倭国の女王の様子が、多少の驚きをもって詳しく記されていたのである。

そしてもうひとつ、古代女性の活躍の裏側で、かならずといってよいほど、醜聞がついて回っていた事実も見逃せない。その例をいくつか取りあげてみよう。

第十五代応神天皇は、四世紀後半に実在したことが確実視されている人物だが、出生に大きな謎が残されている。

応神天皇は第十四代仲哀天皇と神功皇后との間の子で、仲哀天皇はヤマトタケル（日本武尊）の子である。

仲哀天皇と神功皇后は、九州の熊襲が背いたために、二人そろって征討に向かう。筑紫の櫛日宮（福岡県福岡市の香椎宮）で、いよいよ征討を開始しようとしたとき、軍議を開

21

くと、神の託宣が降りた。熊襲を討つ必要はなく、海の方の宝の国を討てというものだった。だが、仲哀天皇はこれ信じず、熊襲征討を強行し、神の怒りに触れ、急死する。

22

一方神の言葉を信じた神功皇后は、夫の喪を隠して、北部九州を支配下に組み込むと、その足で海を渡り、新羅に向かった。

このとき神功皇后は臨月にあたっていたが、腰に石を挟んで産み月を遅らせると、一気に新羅を攻め落とし、北部九州に凱旋し、応神を産み落としたのである。

こうして神功皇后と応神は、ヤマトに帰ってくるのだが、応神天皇の出生には謎が隠されているとする高木彬光氏（『古代天皇の秘密』角川文庫）と安本美典氏（『応神天皇の秘密』廣済堂出版）の指摘がある。

仲哀天皇の死は仲哀九年二月五日のこと。応神が生まれたのは同年の十二月十四日のことで、びたりと十月十日になっている。

だが実際には、受精後十月十日かからず、胎児は生まれ落ちる。科学的な統計によれば、二八〇プラスマイナス一七日を経て、生まれ落ちるといふ。そうなると、応神天皇は仲哀の子ではなかったことになる。『日本書紀』の編者は、「十月十日」という当時の逆念をそのまま記事に織り込み、ぎりぎりのところで、応神が仲哀の子であったことを証明しようとしていたことが分かる。

なぜ「二人の間の子であることが当然」であるはずなのに、『日本書紀』は二人の親子関係を、不自然なほど躍起になって強調したのであろう。

## 住吉大神と夫婦の秘め事をした神功皇后

興味深いのは、<sup>②</sup> 訶志比宮（概日宮）で仲哀天皇が亡くなられた晩の『古事記』の記事で、そこには、仲哀天皇と神功皇后、そして建内宿禰（『日本書紀』にいうところの武内宿禰）の三人が登場し、次のようなやりとりがあつたことである。

仲哀天皇は神を招き寄せようと琴を弾かれ、その廳で建内宿禰が侍った。すると神託が下つて、「西の方角の宝の国・新羅を討てば、その国を手に入れることができる」ということであつた。

だが天皇は、この神託を疑い、見えもしない国を討てとは、人を欺く神に違いないと、琴を弾くのをやめてしまう。

神は怒り、天皇を罵倒した。

建内宿禰はあわてて、

「恐れ多いことです。どうか、琴を弾かれますように」

と促した。仲哀天皇はふてくされたように琴を弾いていたが、音色が透切れたので不審

23

に思い明かりをかざすと、既に亡くなられていたという。

では、この神託を下した神は誰かというところ、天照大神と住吉大神だつたという。

問題はここからである。

大阪の住吉大社（大阪市住吉区）に残された『住吉大社神代記』には、次のような奇妙な記事がある。仲哀天皇が亡くなられた晩、「是に皇后、大神と密事あり」という。神功皇后と住吉大神は、密事を交わしたといひ、ご丁寧に、「密事」の具体的な意味が、「俗に夫婦の密事を通はずといふ」と注を加えている。

一体、神と生身の神功皇后が「夫婦になる」とは、いかなる意味が込められていたのだろうか。

神功皇后と住吉大神の関係の深さは、その後の新羅征討においても、住吉大神が加勢していることから、はつきりとしている。また、神功皇后は至る場面で海神と深い結びつきを持っているが、住吉大神も、日本を代表する海の神であり、大阪の住吉大社では、本殿が四棟建つていて、その中の三つが住吉大神（底筒男命・中筒男命・表筒男命）、廳の棟が、神功皇后を祀る社である。

どこから見ても、住吉大神と神功皇后は、絆が強い。

これに関連して、<sup>③</sup> 継体六年十二月の条には、興味深い記事が残されている。

それは、ヤマト朝廷が百濟側の要請を受け入れ、任那（朝鮮半島最南端の伽耶）の一部

24

を百濟に割譲しようとしたときのことである。交渉に遭わされた者（物部大連鹿火）の妻が、次のように夫を諫めたという。

「朝鮮半島南部の国々は、住吉大神が胎中天皇（応神）に授けられたものです。そこで神功皇后と武内宿禰が国ごとに官家を置いて、海の外の番屏（垣根、防壁）となしたのです。この由緒ある場所を分け与えてしまえば、後の世まで非難されるでしょう」

これを聞いて、夫は病を偽つて、役目を放棄したという。

ここでの注目点は、外交をめぐる問題ではなく、少なくとも『日本書紀』の編者も、神功皇后と住吉大神の蜜月を認知していたところにある。

神功皇后と、住吉大神が、仲哀天皇の遺骸を前に、夫婦の密事をしたという記述は、いったい何を意味しているのであろう。

これは明らかに、そして実に迷めくスキヤンダルである。



『記・紀』で異なる扱いをされる、謎の皇后

持続、斉明、推古……その正体は果たして誰か？

監修・文／水谷千秋

みずたに ちあき／1962年生まれ。堺女子短期大学副学長。文学博士。主な著者は『継体天皇と古代の王権』（和泉書院）、『謎の豪族蘇我氏』（文春新書）、『古代豪族と大王の謎』（宝島社新書）、『日本の古代豪族100』（講談社現代新書）など。

# 神功皇后とは

## 一体何者だったのか？

なぜ天皇ではないにもかかわらず、『日本書紀』には独立した「神功紀」が作られたのか。実在に疑問がもたれている神功皇后だが、その人物像には後世の女帝の姿が反映されているとの説もある。『日本書紀』の編者は神功皇后と三韓遠征で何を描こうとしたのか。

図版作成 デラフ



神功皇后

月岡芳年筆「日本史略図会第十五代神功皇后」より。神功皇后は武人として描かれ、古代日本の朝鮮半島への武力侵攻を象徴する人物だった

神功皇后の三韓遠征と  
応神の即位のストーリー

『古事記』『日本書紀』による

と、第14代仲哀天皇は九州南部の熊襲を征討するために、大和を離れ九州へ向かったと記されている。『古事記』は「穴門豊浦宮」（山口県下関市）、さらに「筑紫調志比宮」（福岡県福岡市香椎）に遷ったとあり、それについては『日本書紀』も一致する。天皇の九州行幸は、12代景行天皇の時にもあったが、目的

『記・紀』で異なる扱い

## なぜ『日本書紀』は 神功皇后の巻を 独立させたのか

は同じである。

しかしそこで、シャーマン

（巫女）である仲哀天皇の太后

「息長帯日売」（神功皇后）が、

不思議な神託を得た。天皇が琴

を弾き、大臣武内宿禰が齋場に

控える中、皇后に憑依した神が

下した言葉は、「西方にある金

銀を始め輝くばかりの宝をもつ

国をお前に授けよう」であった。

しかし天皇は「高い所の上って

西方を見ても国土は見えない。

ただ大海があるばかりだ」と言

って、この言葉を信じなかった。



## 『古事記』「仲哀記」の内容

- ・仲哀(帶中津日子命)は筑紫にあって熊襲討伐を計画。
- ・後の息長帯比売命(神功皇后)に神が憑依し、仲哀、皇后、建内宿禰の3人の前で神託をくだす。
- ・仲哀は神託を疑ったため、神の怒りをかい、すぐに息絶える。
- ・朝廷は大掛かりなお祓いをする。
- ・神は、この国は皇后のお腹にいる皇子が治める国だと告げる。
- ・神功皇后は新たな神託を受けて朝鮮半島に渡海。
- ・新羅と百済を帰属させて帰国。
- ・途中、出産しそうになり石を腰につけて鎮める。
- ・筑紫の地で品陀和氣命(応神天皇)を出産。
- ・仲哀天皇の子、香坂王・忍熊王の反乱を鎮める。

## 『日本書紀』「神功皇后紀」の内容

- ・仲哀(足仲彦天皇)は筑紫にあって熊襲討伐を計画。
- ・仲哀天皇8年、後の氣長足姫尊(神功皇后)に神が憑依し、群臣のまえて神託を伝える。
- ・半年のほど先、仲哀は神託を信じられず熊襲討伐を優先させるが敗北。
- ・にわかにな病気となり、翌日、亡くなる。
- ・熊襲の矢に当たったとの異説もある。
- ・群臣や官僚たちに命じて罪を祓い、過ちを改めた。
- ・仲哀天皇9年、神託を受けた神功皇后は熊襲を帰服させる。
- ・朝鮮に渡海し、新羅・百済・高麗を帰順させる。
- ・筑紫で誉田別皇子(応神天皇)を出産。
- ・仲哀天皇10年、仲哀天皇の子、麿坂王・忍熊王の反乱を鎮める。

『古事記』では神功皇后の事績は仲哀天皇の記事に含まれているが、『日本書紀』では独立した1巻(「神功紀」)が設けられている。



神の怒りを招いた天皇は、気が付くと琴を弾くのをやめ、亡くなっていったという。

そのあとを受け、皇后がさらに神託を聞いた。神は「この国は汝の御腹に坐す皇子」が治めるべき国だと言った。名を問われた神は「底筒男・中筒男・上筒男」(住吉大社の三神である)と名乗り、これは「天照大神の御心」であるとも答えた(『古事記』)。

神託に従って海を渡ると、そこには新羅の国王がいたが、彼らは抵抗もせず、倭国に服従することを誓った。妊娠していた皇后は、筑紫に帰ってそこで応神天皇を出産する。困難が待ち受けていたのはむしろそのあとで、大和には同じ王族の香坂王と忍熊王が軍勢を備えて、九州から帰る皇后母子を待ち受けていた。皇后は既に崩じたという偽りを流して油断させて敵の軍勢を打ち破り、めでたく応神は即位するのである。

## 『神功皇后紀』を独立させた『日本書紀』の意図

『記・紀』の伝承を要約すると

以上になる。それでも両書には見逃せない違いもある。まず神功皇后は天皇ではないにもかかわらず、『日本書紀』は「仲哀紀」を簡略にする代わりに「神功皇后紀」を「摂政前紀」として独立させて一巻とし、そこにこれらの伝承を掲載している。どうしてこうした違いが生じたのだろうか。

『日本書紀』は、天照大神の神託を無視して神罰によって殺された仲哀天皇の巻にあまり多くの文字を費やすのを良しとしなかったのかもしれない。天皇の不名誉なエピソードは控えめに、という『日本書紀』編者の配慮がそこにあつたのであろう。

また7世紀後半から続いて出現する持統や元明、元正といった女帝たちの時代に合わせて、『書紀』では神功皇后の存在を大きくしている可能性もあるだろう。とりわけ正式即位する前に3年間「称制」(天皇の臨時代行)を行った持統天皇の存在は大きいのではないか。『日本書紀』の完成が元正朝であることを考慮すれば、その可能性は十分ある。



根強い「モデル説」を検証し、  
その当否を判断する

# 神功皇后像のモデルは 皇極(斉明)なのか？

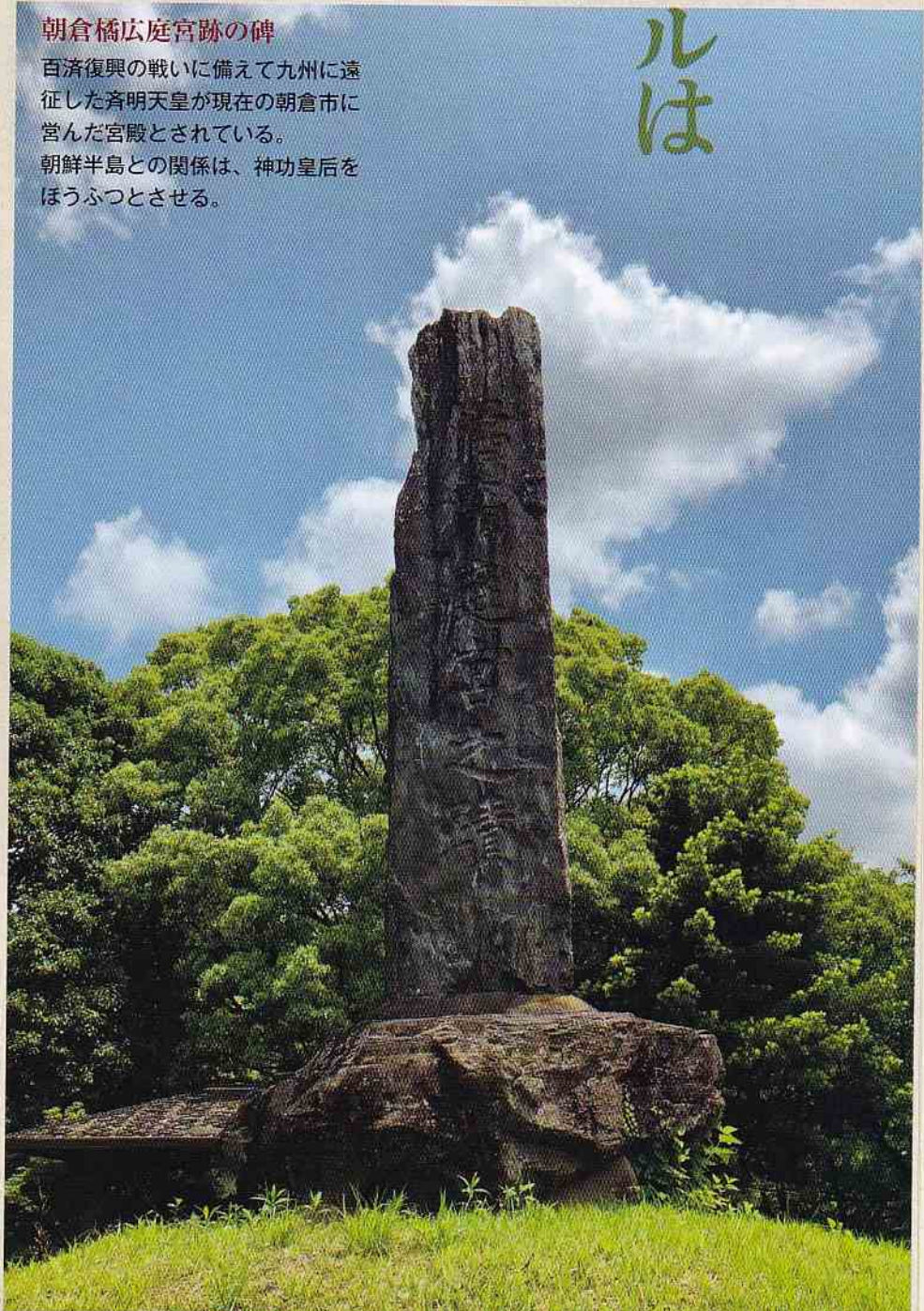
7世紀の斉明天皇との  
類似点をどう考えるか

神功皇后の伝承はどれほどま  
で史実を伝えているのか。辛卯  
の年(391)に高句麗軍と倭  
国軍が戦ったと伝える高句麗好  
太王碑文などを参考にすれば、  
4世紀後半に倭国が朝鮮半島に  
進軍した史実は、ある程度まで  
は認められる可能性が高い。し  
かし、だからといって『古事  
記』『日本書紀』の伝える、か  
なり伝承的な内容の神功皇后の  
遠征までもが、そのまま史実を  
反映したものと考えるのは危険  
すぎるだろう。

一方で、この伝承における神  
功皇后は、7世紀半ばから後半  
の斉明天皇をモデルに造作され  
たものだという説もある(直木  
孝次郎「応神王朝論序説」『日

## 朝倉橋広庭宮跡の碑

百濟復興の戦いに備えて九州に遠  
征した斉明天皇が現在の朝倉市に  
営んだ宮殿とされている。  
朝鮮半島との関係は、神功皇后を  
ほうふつとさせる。



本古代の氏族と天皇)。たしか  
に両者は、半島に兵を出した女  
帝という点で共通点がある。ま  
た神功皇后の名前「オキナガタ  
ラシヒメ」と斉明天皇の名前  
「アメトヨタカライカシヒタラ  
シヒメ」に「タラシ」が共通す  
ること、加えて彼女の夫舒明天  
皇の名も「オキナガタラシヒロ  
ヌカ」であり、7世紀ころの天

皇に「タラシ」を含む名が多い  
こと等を根拠に、神功皇后の名  
前も後世の天皇の名前をモデル  
に創作されたものではないか、  
と推測するのである。  
他にも直木氏は、仲哀が神の  
怒りにふれて急死したことと、  
斉明が遠征先の筑前朝倉宮で急  
死したことの類似性も指摘して  
いる。

斉明天皇は神功皇后の  
故事に倣ったのか？

これに対し塚口義信氏は、多  
くの史料を広く検討し、「タラ  
シヒコ」「タラシヒメ」の尊称  
が、推古朝よりかなり以前から  
一般的な尊称として存在してい  
たことを明らかにした(『神功  
皇后伝説の研究』『ヤマト王権







## 神功皇后と武内宿禰

神功皇后を描く作品には、常に皇后に付き従った武内宿禰の姿が描かれる場合が多い。その働きは『記・紀』に同様に描かれている。

『日本略史図解 人皇十五代』東京経済大学図書館蔵



三韓遠征の成果を  
より大きくアピールする『日本書紀』の意図とは？

# 三韓遠征伝承の違いは何を意味するのか？

神功皇后伝承からみる

『記・紀』の性格の違い

『古事記』と『日本書紀』の間にある神功皇后伝承の差異には、両書の性格の違いが現れているとも言えるだろう。

まず『古事記』には、神功皇后に下された神の言葉を信じなかった仲哀天皇が神罰により崩御する場面が、詳しく生き生きと描かれている。天皇の弾く琴の音が絶えたのに気付いた建内宿禰が「火を挙げて見れば」、既に天皇はこと切れていたという。この表現からすれば、祭祀が行われたのはやはり夜のことと見える。

しかし『日本書紀』はこの場面を詳しく語らない。本文は「天皇は突然に体が痛み、衰弱して、次の日に崩御された。時に52歳。神の言を用いなかった

ために、早く崩御された」とあるだけである。「一云」として収録した異伝には「親ら熊襲を伐とうとして、賊の矢に当たって崩御された」とあって、神罰ではなく熊襲との戦いで戦死したとする。これは神罰にあたって崩御したという元の伝承を、現代風に解釈したものに過ぎないだろう。ここに『書紀』編者の合理的な視点が見て取れる。

実際に半島に渡海して「征討」する所伝にも見逃せない違いがある。『古事記』では、皇后の軍にひれ伏すのは新羅の国王だけであるのに対して、『書紀』は新羅の王が降伏したのを見た「高麗・百濟、二国の王」が「今より以後、西方の蕃国と称して、朝貢を絶ちません」と服従を誓う。『書紀』はこの時に新羅・高句麗・百濟三国が倭



# 仲哀天皇と神功皇后の行程



**神功皇后上陸地の碑**  
神戸市兵庫区の三石神社に建つ。三石神社のある和田岬は、三韓遠征の帰路、神功皇后が上陸した地とされている。



熊襲征伐や三韓遠征の途中、神功皇后が立ち寄った場所との伝承が西日本の各地に残されている。とくに九州には多くの伝承地が残されている。



**廣田神社** 西宮市に鎮座する神社。三韓遠征の帰路、神功皇后がこの地に天照大神を祀ったのが創建の由緒とされている。



**生田神社** 神戸市中央区の神社。三韓遠征の帰途、神功皇后が稚日女尊を祀ったのが神社創建の由緒とされている。稚日女尊は天照大神の幼名ともいわれる。

国に服したと伝えるのである。

## より政治性の強い『日本書紀』の記述

こうした伝承がどこまで史実に基づくものなのか、疑わしいところもあるが、のちのち倭国はこの時の伝承を根拠に、半島への権益を主張するようになり、これが最終的に白村江の戦い(はくせんこう)にまで至ることになる。この点で『書紀』の伝承はより政治性の強いものといえる。

『記・紀』で共通するのは、半島の国々が何らの抵抗もせず、倭国の軍がやすやすと征討に成功を収める点である。『古事記』ではそれは天照大神や住吉三神の神威のせいとされ、『書紀』ではそれは「聖王」と称えられる天皇の人徳によるところが強調されている。

むしろ皇后にとって試練であり、試金石となるのは帰国後に待ち受けていた列島内の権力争い——香坂王・忍熊王との戦い——であった。これに勝利することで、皇后は真に権力を握り、やがてその皇子である応神天皇が即位するのである。